

令和元年度病虫害発生予報第9号

令和元年10月2日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
果 樹	ナシ	黒星病	—	やや多い
	共通 (ナシ、柿、ブドウ、リンゴ)	カメムシ類	—	やや多い
野 菜	キャベツ、 ブロッコリー	軟腐病	平 年 並	平 年 並
		黒腐病	—	平 年 並
		べと病	やや遅い	平 年 並
		黒すす病	平 年 並	やや多い
		アブラムシ類	—	平 年 並
		コナガ	—	やや少ない
		ハスモンヨトウ	—	やや多い
	ネ ギ	黒斑病	—	平 年 並
		さび病	平 年 並	やや少ない
		べと病	平 年 並	平 年 並
		ネギアザミウマ	—	平 年 並
		ネギハモグリバエ	—	平 年 並
		シロイチモジヨトウ	—	平 年 並

気象予報（抜粋）

1か月予報（9月28日～10月27日：9月26日、広島地方気象台発表）

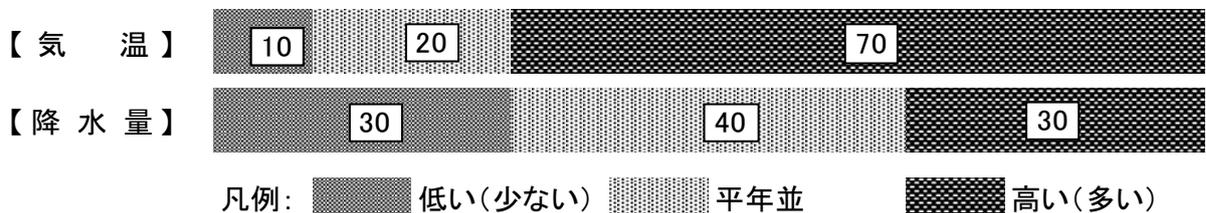
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

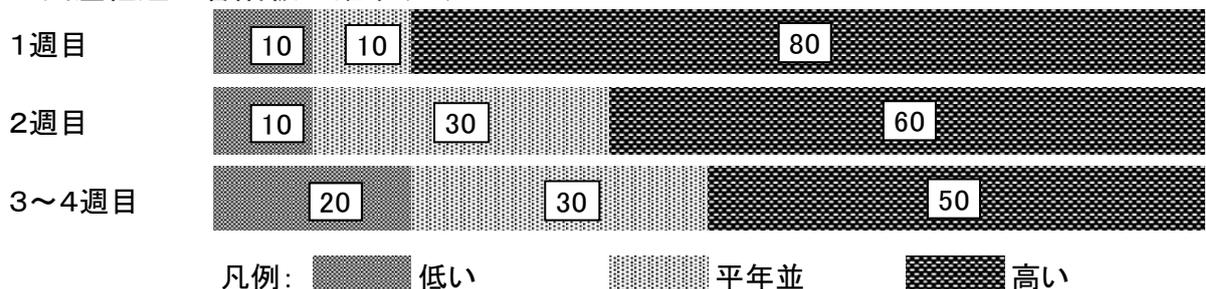
向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



果 樹

[ナ シ]

1 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における秋型病斑の発生量は例年並である。

イ 一部の現地ほ場で果実被害の多かった園が認められた。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本病の感染に好適な条件が見込まれ、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本年発生が多かった園では、芽鱗片への感染を防ぐため10月上旬～11月上旬に2～3回の薬剤散布を行う。薬剤は、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、オルフィンフロアブル4,000倍液などを使用する。

イ 晩生品種との混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

ウ 病落葉も翌春の第一次伝染源になるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

[共通（ナシ、カキ、リンゴ）]

1 カメムシ類（令和元年7月11日付けで病虫害発生予察注意報第1号を発表）

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月中旬現在、県内4カ所に設置した予察灯におけるカメムシ類（特にチャバネアオカメムシ）の誘殺数は、平年に比べてやや多い。

イ 9月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場河原試験地、カキ、‘輝太郎’）で果実被害が認められている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、今後もカメムシ類の加害活動にやや好適な条件が続くと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除のタイミングは、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとに県防除指針や防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫期となっているため、農薬の使用基準を遵守する。

野菜

[キャベツ、ブロッコリー]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場において発生は確認していない。
- イ 本病は降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすく、滞水が多い場合、特に発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場の排水に努める。
- イ 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。
- ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風直後は、天候回復後できるだけ早く薬剤散布する。
- エ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの防除薬剤は、ナレート水和剤1,000倍液、銅水和剤（Zボルドー500倍液、又はクプロシールド1,000～1,500倍液）などを散布する。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。
- イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風直後は、天候回復後できるだけ早く薬剤散布する。
- ウ 肥料不足で発病が助長されるため、肥料切れしないよう注意する。
- エ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブ500～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1,000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場において発生は確認していない。

イ 本病は10～15℃程度の気温で、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、マンゼブ水和剤（ジマインダイセン水和剤、又はペンコゼブ水和剤など）400～600倍液、リドミルゴールドMZ1,000倍液、フォリオゴールド800～1,000倍液、シグナムWDG1,500～2,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液などを予防散布する。

イ ブロッコリーの晩生品種では、花蕾にべと病が発生しやすいので防除を徹底する。

ウ ブロッコリーの薬剤防除は、中～晩生品種ではフォリオゴールド1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液、シグナムWDG1,500～2,000倍液などを10月中旬～11月上旬頃の発生初期に10日間隔で2回程度散布する。

4 黒すす病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は、気温25℃付近が発病適温であり、多湿条件下で発生が多くなる。

また、降雨と強風により発生が多くなるため、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

イ ブロッコリーの薬剤は、シグナムWDG1,500倍液、アフエットフロアブル2,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、パレード20フロアブル2,000倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、リーフガード顆粒水和剤1,500倍液、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、ランネート45DF1,000～2,000倍液、ウララDF2,000～3,000倍液、モベントフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

6 コナガ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場におけるフェロモントラップによる成虫の誘殺数はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツでは結球開始期に、ブロッコリーでは出蕾までに、トルネードエースDF2,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。

イ 上記生育期以降に発生がみられる場合は、キャベツ、ブロッコリー共に、ディアナSC2,500～5,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

7 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場におけるフェロモントラップによる成虫の誘殺数はやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行うのが効果的である。ほ場内を観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツの薬剤は、トルネードエースDF2,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの薬剤は、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

[ネギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足で発病が助長されるので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）600倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1,000～1,500倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍液などを散布する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場において発生は確認していない。
- イ 本病は、夏期が猛暑の年は秋期の発生が少なくなる傾向がある。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1，000倍液などを使用する。発病後は、上記の薬剤にカリグリーンを800倍で混用して散布するか、アミスター20フロアブル2，000倍液、ファンタジスタ顆粒水溶剤3，000倍液などを散布する。

3 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場において発生は確認していない。
- イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後は早期にまん延するため発病前からの防除に努める。
- イ 次年度に向けて越冬伝染源を減らすためにも、秋期防除を徹底する。
- ウ ジマンダイセン水和剤600倍液、ランマンフロアブル2，000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ダイナモ顆粒水和剤2，000倍液などを予防散布する。
- エ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1，000倍液、フォリオゴールド800～1，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1，000倍液、メジャーフロアブル2，000倍液などを散布する。
- オ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグリメック500～1，000倍液、ハチハチ乳剤1，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液、ウララDF1，000～2，000倍液などを、7～10日間隔で10月中旬頃までローテーション散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤 2, 0 0 0 倍液、アグリメック 5 0 0 ~ 1, 0 0 0 倍液、ディアナSC 2, 5 0 0 ~ 5, 0 0 0 倍液などを散布する。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場のフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫による被害がみられる場合は、スピノエース顆粒水和剤 5, 0 0 0 倍液、プレオフロアブル 1, 0 0 0 倍液、トルネードエースDF 1, 0 0 0 倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第10号の発表は、12月4日（水）の予定です。
なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。